

新進芸術家海外研修制度 研修結果報告書

研修開始年度 | 令和 3 (2021) 年度

分 野 | 映画 (ドキュメンタリー)

研 修 先 | アメリカ (ケンタッキー州ホワイツバーグ)

研 修 期 間 | 1 年研修

氏 名 | 加瀬澤 充

1. 研修目的（課題）

今回の研修の目的は、アメリカのケンタッキー州に 1969 年に設立され芸術拠点として機能してきた Appalshop の活動について調査・研究することです。特に、主要な活動の一つである若者に向けたドキュメンタリーワークショップの活動については重点的に調査を進め、映画やアート活動が社会へどのような方法でインパクトを与えられるのかを学んでいきます。その為、ドキュメンタリーワークショップなどのメソッドや実際の運営方法をその効果も含め調査・研修していきます。

2. 研修日程

研修先 : Appalshop

所在地 : アメリカ（ケンタッキー州ホワイツバーグ）

指導者 : ウィラ・ジョンソン、ジェシカ・シェルトン(AMI Director)

アレクサンダー・ギブソン(Appalshop Director)

研修期間 : 令和 4(2022)年 3 月 29 日～令和 5(2023)年 3 月 5 日

3. 研修内容、成果

A) 研修課題の題目

【課題①】 Appalshop の歴史調査

【研修内容・方法①】

地域に密着したアート支援団体、Appalshop の歴史調査を進めます。Appalshop は長い歴史の中で様々な形でアートを活用した社会運動をしてきました。その活動は映像として記録されています。保管されている映像素材を調査し、映像制作ワークショップなどの彼らの活動がどのような歴史をたどったのか、どのような意図を持って開催されてきたのかを学びます。実際に活動に関わってきた歴史を知る人にもインタビューし、アートによる社会活動の歴史を検証し、アメリカの地域の物語を紐解いていきます。また、アーカイブ映像管理の実際についても研修します。

【課題②】 ドキュメンタリー映像制作ワークショップの調査

【研修内容・方法②】

ドキュメンタリー映像制作ワークショップ、Appalachian Media Institute(AMI)の準備から運営までに研修参加します。Appalachian Media Institute(AMI)は 33 年の歴史を持つ映像制作ワークショップで、夏に 8 週間をかけておこなわれます。準備段階から参加し、なぜ若者たちがワークショップに参加したのか、実際に参加していく中で何を感じているのかなどをインタビュー取材していきます。また、運営スタッフがワークショップのプロセスの中で、どのように若者たちを指導していくのかを、映像でも記録し、インタビュー取材するなどワークショップのメソッド獲得を目指します。制作された若者のドキュメンタリー作品が、サンダンス国際映画祭などで高い評価を獲得できている理由についても考えていき

ます。

【課題③】ドキュメンタリー以外のアート活動に関する調査

【研修内容・方法③】

地域に密着したアート施設、演劇、ラジオ、ギャラリーなどの常時施設への研修。地域との関わりを調査します。Appalshopは常時、演劇シアターやラジオ放送局、ギャラリーなどを運営をしています。アートによる社会運動を継続的に実地していくために何が必要なのか、常時施設への研修参加と調査で検証していきます。どんな人々が施設に参加し、Appalshopへの参加で何を感じたのかをインタビュー調査していきます。また、地域住民とどう関わってきたのかも検証していきます。

B) 研修の成果

【研修課題の細目①】Appalshopの歴史調査

大幅に達成できた

Appalshopが管理している過去のドキュメンタリー作品を試写し、アーカイブスの管理の実際について担当のスタッフにインタビューするなどをして、Appalshopとこの地域の歴史についてや、アーカイブス管理の実際を、把握することができました。

初期に制作された作品は、地元の屠殺の技術を取材した「Woodrow Cornett, Letcher County Butcher」や仕事がない若者たちの問題を取材した若者自身が取材した「Appalachian Genesis」など、地元の文化や問題を取り上げているところに大きな特徴があり、1969年以降に制作された作品も、変わらず地元のことを取材しています。地元の人々がドキュメンタリーを制作していく中で自身の視点を獲得していこうとしているのが、作品群から見て取れました。

1969年の第1回のワークショップの参加者で、その後はスタッフとしてドキュメンタリーを作り続けてきたハービー・スミスに話を聞くことで、なぜ、この地域でAppalshopの活動が始まり続いてきたのかが、明らかになりました。

この地域は元々アメリカの中でも最貧困地域として苦しんできた地域であり、あたりにくらす人はヒルビリー（馬鹿な田舎者）としてステレオタイプな見方を強要されるという歴史がありました。そこで、外部からのステレオタイプな見方に対抗し、自分たちのストーリーを語るという目的で、ドキュメンタリーワークショップの歴史がスタートしました。

今もなおそれが続いてきているのは、この活動が地元の若者たちにとってアイデンティティ形成に重要な役割を果たし、尚且つそれが地域の人々に受け入れられているからだということがわかりました。それぞれの年代の若者のドキュメンタリーが映像として記録されていることで、この映像群は地域の記憶のような形で保管され、記憶の継承が今も続いていることが、非常に重要だと感じています。



ケンタッキー州ホワイトバークの町の様子



Appalshop のビル (2022 年 4 月撮影)

【研修課題の細目②】ドキュメンタリー映像制作ワークショップの調査

大幅に達成できた

Appalshop のドキュメンタリーワークショップ、Appalachian Media Institute (AMI) の様子に密着してノウハウを調査しました。このプログラムは6月6日から2ヶ月間にわたるプログラムです。前半の1ヶ月間は、過去作を鑑賞したり、地元の企業のプロモーションビデオ制作などをしながら、ドキュメンタリー制作の最低限のノウハウを学んでいきます。

特に、これまで Appalshop が制作してきた作品も試写していくことで、なぜドキュメンタリー制作がこの場所で重要なのかを教えていくカリキュラムが印象的でした。ステレオタイプな視点に晒されてきたこの地の人々がドキュメンタリー制作をしていく中で獲得してきた自分たちの視点の積み重ねが、ドキュメンタリーを教えるためのノウハウとして生かされているのを感じました。また、映像に関してだけでなく、写真や、詩の授業などもあり、ドキュメンタリー作家だけではなく、様々なアーティストが組織に参加している Appalshop ならではの授業が組まれています。多角的にドキュメンタリーについて考えさせるカリキュラムになっていることで、自由な思考を若者たちに植え付けているのを感じました。また、Appalshop が地域の芸術の拠点として様々な芸術家や人々が交流する拠点にもなっており、こうした開かれた組織があることが地域の中で重要な意味を持っているのではないかと思います。

また、後半の1ヶ月は実際のドキュメンタリー制作へと移って行きました。11名の若者たちはそれぞれチームに別れ3本のドキュメンタリーを制作しました。一つは、アメリカで大きな議論を起こした中絶の是非に関するドキュメンタリーです。若者たちは中絶の権利を制限しようという動きに反抗するムーブメント取材しています。もう1本は地元の芸術家たち取材したドキュメンタリー、そしてもう1本はこの地域のゲーム文化取材したドキュメンタリーです。

それぞれ独自の視点で、自分たちの足下の問題を掘り下げて行きました。ドキュメンタリー制作が地域や自分たちのルーツについて深く考えるプロセスになっていると感じ、教育的効果が高いと感じました。しかし、今回完成作品の上映会が7月29日に地元で開催される予定でしたが、ケンタッキーを襲った歴史的洪水により、編集素材は水没し、上映会はキャンセルとなってしまいました。その後の復興に向けたプロセスが進んでいく中、当初の予定とは違う形になりましたが、3時間ほどの遠い街でスクリーニング

が行われました。また、映画祭に招待作品として上映される機会もありました。若者たちの作品は、ローカルなテーマを取り上げてはいるものの、その問題を当事者たちが作るという映画の特異性と重要性が評価の対象になっているのではないかと思います。

【研修課題の細目③】ドキュメンタリー以外のアート活動に関する調査

あまり達成できなかった

Appalshop はドキュメンタリーワークショップ以外にも WMMT というコミュニティラジオの活動や、ロードサイドシアターという劇団と自分たちの劇場をもち、演劇活動を続けています。

しかし、今回7月29日に起きた洪水により、WMMT の活動と、演劇活動についてはかなり制限される状態になりました。

元々、WMMT は地元の人々や Appalshop のスタッフが毎日 DJ を務めており、地域の情報を発信する地域の拠点として人気が高い放送局です。そのため、人々のつながりを生み出す装置としてホワイツバーグで大きな機能を果たしているとスタッフのインタビューで感じました。

Appalshop の建物の中にスタジオがありましたが、洪水のために使用不可になり、車をラジオステーションに改造して、WMMT が復旧しました。そのプロセスはみることもできたことは非常に印象的でした。ケンタッキーの人々は苦しい時期を過ごしていますが、こうしたラジオの復旧のプロセスを通じて、コミュニティラジオが人々の心にもたらす影響についても、知ることができたと感じています。ロードサイドシアターについては、洪水の影響であまり動きがない状態になってしまったので、調査は進められませんでした。

C) 研修成果の活用計画

今回、およそ1年間の滞在の中で、ドキュメンタリーワークショップに参加した若者や、かつて参加した証言者など数多くの方の話を聞かせてもらい、それを撮影もしています。こうした人々の話を編集し、まとめていくことで、Appalshop の活動やこの地域の歴史をまとめたドキュメンタリーを制作したいと思っています。

この1年間、私たちはなぜドキュメンタリーを制作し、作るのかという大きな問いを常に考えてながらいろんなかたの話を聞いてきました。この経験をこの撮り溜めた素材を通じて紹介できればよいと思っていますし、また1年で経験したことは、これからの映像制作においても重要な転機だと現在感じています。

D) 研修国の情報

滞在したのは、アメリカでも特に田舎のケンタッキー州ですので、大都市ほど映画を頻繁に見れる環境

ではありませんでした。 Appalshop は定期的に上映会などを開催していますので、この地域の中では上映機会を提供する大事な組織だと思います。また、山深いからこそだと思いますが、カントリーミュージックなどの音楽や絵画などの芸術が盛んなことに大変驚きました。こうした文化はアパラチアンカルチャーとして知られ、今も途切れることなく続いています。この地域独自の文化が息づいている場所だと思います。

また、映像制作のジャンルにおいては、アメリカ国内のFUNDが数多く存在し、制作を助成しているのを感じます。こうした助成金の制度があることが、芸術家育成の一助になっているのだと思います。